
どこもかしこもモンスター

ハウレン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

どこもかしこもモンスター

【Nコード】

N5286I

【作者名】

ホウレン

【あらすじ】

ある日突然、恐竜のような姿をしたモンスターの群れが空から降ってきた。世界中がパニックに陥る中、逃げる者、戦う者、諦める者……様々な思惑が交錯する。

一話（前書き）

「肩の力を抜いて執筆」を心がけて。短く細かく投稿の予定。

一話

バイトであるピザの宅配を終えた帰り道、交差点で止まった黒い車を追い抜くために、歩道ギリギリへとバイクを寄せて横に並ぶ。ちらりと車の運転席を見れば、いかにも化粧の濃さそうなおばさんが仏頂面で信号機を睨んでいた。

金曜の夕方。

きつとスーパーが何かに寄った帰りなのだろう。助手席に二つの膨らんだ買い物袋が置いてあった。エコに関心がないのか、バッグは使っていないらしい。

「ふあ……」

信号機の赤の色を見ると、いつもあくびが出る。

あの色は、きつと退屈の象徴なのだと思う。だからこそ、とくに興味もない隣の車の様子など観察してしまうのだ。

などと考えにふけても、信号の色はなかなか変わらない。そこでふと思いついたのは、バイトの先輩が言っていた変わらない信号機の話。

ちっ、と思わず舌打ちが出る。

確か、あの話の場所はここだった。なぜもつと早く思い出さなかったのか、歩道を悠々と歩いているサラリーマンや学生が何となく妬ましい。

「ほんとに長いな……」

信号は嫌味なほどに、その赤を照らす。あまりに動かないから、ヘルメットの中がかゆくなってきた。

帰ったら、市役所に文句を言ってやるつか。

もう二度とこの道は使っまいと考えながら、目の端で、歩行者用の二色の信号機が点滅するのを見た。

ようやく動くのか、ホッと安堵の息を吐く。

その瞬間

バン、とすぐ近く大きな音がした。

ちょうど、カンフー映画などで車のボンネットに主人公が飛び乗ったときのような。

ハッとして、音のしたほうを見る。

「な……っ!」

最初に青が見えた。

次に聞こえたのは、何か金属を擦るような甲高い音。例えるならば、怪獣が何かの吼えるような……。

ギロリと、そいつはこちらを見た。

「う、あ……」

喉の奥から声にならない声が漏れる。

そこかしこで悲鳴が上がった。

なんだこいつらっ！

遠くで誰かが叫んだのを聞いた。

こっちだつて、同じことを叫びたい。

なぜなら、いま隣の黒い車のボンネットにたつて、そのギョロとした猛禽のような目をこちらに向けているのは、

「恐竜………?」

青と白の鱗に覆われた身体を持つ、二本足で立つ爬虫類のような生き物だったのだから。

一話

頭から尻尾にかけて規則正しく並んだ青い鱗を下地に、黒の縞模様。

前足と後ろ足には、まるでナイフのように鋭い爪が鈍く光っている。

顔は特徴的で、長く伸びた黄色のくちばしと頭の上のトサカは、まるで鳥のようだ。ただ鳥と違うのは、くちばしに並んだいかにも肉を食い干切りそうな牙。もしもあれに噛まれれば、痛いではすまないことは一目で分かった。

その姿はまさに恐竜のようで、あのハリウッドの恐竜映画に出てきた小型の肉食恐竜にそっくりな骨格をしている。

そいつは、不意に俺に向かって高く飛び上がった。

「な……っ！」

ドン、と音がして頭上のルーフが歪む。

俺はあわてて、バイクのアクセルを入れた。

一気にアクセルを入れたせいでスリップする車体をなんとか制御する。

「くそっ、なんだこいつは！」

バイクがしっかりと地面を噛んだ瞬間、僅かにGがかかって景色が飛んだ。

同時に、頭上の気配が消え、背後で落下音と妙な泣き声が出た。

速度を少し落とし、ため息を吐く。

「何が起こってるんだ……？」

街を見れば、そこかしこで人々が逃げ惑っていた。

それを追いかけているのは、あの青い恐竜のようなやつだ。

あれ一匹じゃなかったのか。

もう一度アクセルを強く握る。

バイト先に戻る気はしない。ここはとにかく、アパートに帰ろう。

そう思い、俺は交差点を左に曲がった、瞬間

「うおあっ！」

こっちに向かって、乗用車が突っ込んできた。

「ぬあああ　っ！」

必死にハンドルを曲げ、膝がアスファルトに着かんばかりに回避を試みる。

ほんの一瞬のすれ違いが、数分にも感じた。

「あ……危なかった……」

すれすれだった。もしかしたら、掠るくらいしたかもしれない。ともかく、家に帰るのだ。

何が起こってるのか分からない以上、頼れるのは居慣れた場所。

これも、帰巢本能なのかもしれないと、場違いな考えにまた溜め息が出た。

三話

六畳一間1DK、風呂トイレつき家賃三万八千円。部屋の真ん中に置かれた小さめのテーブルと、壁際にはタンス代わりのカラーボックス。そして、一週間前に買った19型の液晶テレビ、地デジ対応。そんな部屋。

俺は崩れるように、テーブルの前に座った。

あれから何とか、俺は自分の部屋に帰ってきていた。幸いにも、このアパートの辺りには、あいつらはいないらしく、割と慌てることなく部屋に入ることができた。

だが、それまでバイクの上から見た街の風景は、凄惨極まりないものだった。

やつらは、食っていたのだ……人を。

見たくない心と、信じたくない心、そして運転中だということもあってチラリとしか確認はできなかったが、恐らく間違いはないだろう。

そう考えて、顔から血の気が引いていくを感じる。

いま冷静になったからこそ、その恐怖をありありと実感した。

「……なんなんだよ、いったい」

つぶやき、俯いていた顔を上げれば、目の端に床に無造作に転がったテレビのリモコンが映る。

そうか、テレビだ。

あれだけのことが起こったのだ、俺の夢や妄想でもなければ、い

まじろ騒ぎになっているに違いない。

そう思い、手を伸ばしてリモコンを拾う。

『 なお、政府は突如として現れたこの青い恐竜に似た生物を、便宜上”ランポス”と名づけ……』

テレビに映ったニュース番組は、酷い有様だった。

若い女性のキャスターは次々と手渡される書類に困惑し今にも泣きそうな表情で断片的にしか情報を言葉にできておらず、カメラの前を何度もスタッフらしき人物が行き交い、ばたばたと走る音や怒鳴り声が幾度も聞こえた。

「くそっ！」

俺は叩きつけるように、テレビの電源を切った。

あの状態では、テレビから情報を得ることができるのかどうか。

今見た限りで得たのは、やつらをランポスと呼ぶことにしたことそして、世間は俺が想像した以上のパニックに陥っているということとだけだ。

俺が苛立ちにリモコンを放り投げたそのとき

ドン、と玄関から大きな音が聞こえた。

「っ！」

慌てて玄関のドアを振り向く。

その瞬間、もう一度、ドン、と、ノックなどではない、何かもっと大きなものがぶつかってきているような……

「まさかつ」

最悪な想像が頭をよぎる。

俺は咄嗟に、押入れの奥に仕舞っていたリュックサク型の災害バッグを引っ張り出した。一人暮らしをするといった俺を心配して両親が持たせてくれたものだが、まさか役に立つとは思わなかった。そういえば、父さんと母さんは無事だろうか。実家のほうに、もしあいつらが現れていたなら　などと悠長に考える時間も与えず、再びドアが音を鳴らす。見れば、ドアが僅かに内側に歪んで外の光が漏れている。

逃げなくては。

あんなやつらに狭いところで追い詰められて、どうにかできる自信はない。

俺は窓に寄って、外の様子を見た。

窓の外に広がるのは、住宅街。見える限りでは、やつらがいる気配はない。

俺はできる限り音が立たないように、ゆっくりと窓を開け、棧に足をかける。ここは二階で、飛び降りるのは少しきついが、ぶら下がるように降りれば問題ない。

こうしている間にも、ドン、ドン、と音は鳴りドアに亀裂が入る。

「……はあ、なんでこんなことになったんだろうな」

それはたぶん、今このときこの付近に住む誰もが口にする疑問。だが、偽りのない本心。

なんにしても、やつらに……ランポスとやらの食われてやるわけにはいかない。俺はできるだけ慎重にしかし急いで、窓から地面へと降りた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5286i/>

どこもかしこもモンスター

2010年10月13日21時18分発行